

大学の授業における半構成的エンカウンター・グループの事例研究

A case study of semi-structured encounter group in the class of university

谷澤 祐子 野部 晶代 勅使河原由季 野島 一彦
跡見学園女子大学
人文科学研究科

Yuko Yazawa Akiyo Nobe Yuki Teshigawara Kazuhiko Nojima
Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities, Atomi University

要 約

このたび筆者らは、学部の授業において「半構成エンカウンター・グループ」を実践した。本稿では、その事例を提示し、次の3点について考察を行った。(1)メンバーにとつてのグループ体験：それぞれに何らかの課題や悩みを持っているが、このグループ体験を肯定的に受け止め、「自己信頼」をより確かなものにした。(2)「構成」→「半構成」→「非構成」における体験の変化：ファシリテーターの指示に従ってパフォーマンスを行っていけばよいという、依存的・受動的な心理状態に置かれており、自己理解は浅い。→最初Meは時間内で話し終わらない悩みを訴える人が圧倒的に多かったが、回を重ねるごとにその課題は解決され、話の「内容」について考察するようになっていった。→現実がままならないことに対する自己への反省を述べたり、過去のつらい出来事を思い出して落涙したり、また逆に正面から向き合ったことを述べることを避けてか、まったく関係のない一般的な話題を述べたり、各人ともさまざまな心理的な様相を示した。(3)ファシリテーションについて：ファシリテーターに対し、メンバーは安心感、安全感を抱いていた。コ・ファシリテーターは、ベテラン・ファシリテーターと組むことにより、「負担のない形で」「技法や態度を目の当たりにし」「それらを取り入れ、学習する」ことができた。メンバーひとりひとりがファシリテーション機能を持ち、グループを作っていた。

【Key Word】半構成的エンカウンター・グループ、大学、授業

I はじめに

エンカウンター・グループとは、「個人の成長、個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発展と改善」(Rogers, 1970/1982)を目的とした集中的グループ体験である。最初のエンカウンターグループが

1969年に日本で実施され、以来さまざまな分野において、実践や研究がなされている。

もともとは、見知らぬ集団において行われることが多かったエンカウンターグループだが、近年では、教育領域において、ク

ラスや部活等、既に顔見知りの人々の集団においての構成的エンカウンターグループが盛んに実施されている。学校現場での人間性教育や体験学習として、また人間関係の研修として実施され、メンバー個人の心理的成長だけでなく、グループ全体の仲間関係などの変化にも目標が置かれている(安部, 2006)。その中でも、臨床心理を中心に学ぶ学部でのエンカウンター・グループは、自己理解や他者理解などの気づきを深める心理的体験学習として、多く実施されている領域であるといえる。

エンカウンター・グループは、通常エクササイズを取り入れ、それを中心に構造化された「構成型エンカウンター・グループ」と、構造化されていない「非構成型エンカウンター・グループ」の2つの意味で使用される(野島, 2000)。最近では、「構成型」と「非構成型」の2つを融合させた「半構成方式」という新しい方式のエンカウンターグループが実施されている(森園・野島, 2006; 星野・野島, 2008)。

野島・森園(2006)の「テーマの設定」と「セッション中のメンバー(以下、Meと略記)全員の発言」という特徴を盛り込んだ「半構成方式」は、①非構成型と同様、10人前後のMeによってすべてのセッションを行う、②各セッションのテーマを決め、そのテーマに沿ってグループは展開される、③テーマやグループの進め方は、グループの展開によって柔軟に変更される、④1つのセッションで全員が発言する機会を与える、というものである。

ところで大学の授業へのエンカウンター・グループ導入の実践は、わが国では結構行われている(福井, 1981, 新田,

1982, 鳴沢, 1987, 野島, 1997, 鎌田・村山, 2000, 増田, 2000, 野島・金子ほか, 2004, 野島・江ほか, 2008, 野島・高橋ほか, 2010など)。大学の授業は認知学習が多いが、人間関係が希薄と言われる今日では、エンカウンター・グループのような学生の間関係を深める体験学習は、意義があるように思われる。

このたび筆者らは、そのようなことを意識して、学部の授業において「半構成エンカウンター・グループ」を実践する機会を得た。そこで本稿では、学部の授業における「半成的エンカウンター・グループ」の事例を提示し、(1)メンバーにとってのグループ体験、(2)「構成」→「半構成」→「非構成」における体験の変化、(3)ファシリテーションについて考察する。

II グループ構成

1. グループの位置づけ

X年の春学期(4~7月)に、学部3年生(10名)のための演習の時間(90分間)に、13セッション、エンカウンター・グループを導入した。

2. グループ編成

メンバーは学部生10名、ファシリテーター(以下、Facと略記)は教員1名、コ・ファシリテーター(以下、CoFacと略記)は院生3名(全員女性)。

3. グループの進め方

第1セッションはウォーミングアップのための構成的エンカウンター・グループ。第2~13セッションは半構成的エンカウンター・グループ(前セッションに予告した「テーマ」について一人3分の発言→フリー)。

「テーマ」はMeに事前(前セッション)に知らせる形をとった。野島・桂木ら(2007)のテーマを参考に、身近で語りやすく、そして重要だと思われるテーマとして、「私の進路をめぐる過去・現在・未来」, 「友人」, 「仲間」, 「異性・恋愛」, 「結婚」, 「家族」, 「先生」, 「私のキーワード」, 「今、ここで話したいこと, 話せること」をFacが用意した。

セッションの流れは、①Facが前回の「Seアンケート」をランダムに3つ選んでコメントをする。②前セッションに伝えた本時のテーマについてFacが最初に(タイマーで時間を計りながら)3分発言する。話し終えたら次に発言する人にタイマーを渡す。③話す人は1人3分発言する。話し終えたら次に発言する人を指名してタイマーを渡す。④すべての人が話し終えた後(15分程度)は、話が途中だった人や気になることを質問したい人などが自由に話し合うようにする。⑤最後にFacが次のテーマを発表する。⑥「Seアンケート」に記入する。

4. 場所

場所は講義棟のなかの教室(定員45名)。机と椅子を脇に寄せて、椅子だけで丸くなって座る。

5. リサーチ

グループ前後に「参加者カード」, 毎セッション後に「セッション・アンケート」を実施した。

6. グループ・スーパービジョン

毎Seについてグループ・スーパービジョン(以下GrSV)が行われた。GrSVでは、CoFacが前回の授業で行われたグループの「Seアンケート」で気になったところを

報告し、FacがGrSVを行った。振り返りのディスカッションの後、次Seのプログラムの打ち合わせを行った。

Ⅲ 経過

1. 参加前の気持ち

MeのGr開始前の参加意欲度, 期待度の平均値は、それぞれ5.8(SD=0.92), 5.8(SD=1.03)であった。自由記述では、「個人ではなく、他者とのふれあいなので、楽しく勉強していきたいと思っています。」「今回の研修で、グループ・エンカウンターがどのようなものなのか、イメージを固めたいと思います。」「人との深い関わりということを体験を持って学んでいきたい。」などであった。

2. グループ・プロセス

●1回目=オリエンテーション

1回目の授業は、エンカウンター・グループについての説明と、Fac, CoFac, Meの紹介と挨拶がおこなわれた。

●2回目=セッション1 <ウォーミングアップ> (魅力度〔7段階評定(1~7)の平均魅力度〕: 5.89)

マンウォッチング→2人組マッサージ→背中合わせ→キーワード付き自己紹介。

スタッフの感想: Me間でも話したことがあるMe, 話したことがないMeが居たためか、若干の緊張感やぎこちなさを感じられた。

●3回目=セッション2 テーマ: 「私の進路をめぐる過去・現在・未来」 (魅力度: 6.11)

スタッフの感想: 参加したMeは9名(10名中)。Se1に比べると緊張感は和らいで

いる印象を受ける。メンバーはそれなりに自己開示している。

Meの感想：(グループの動き・雰囲気, 他のメンバーの動き)前回と比べて少し, 全体的に緊張があった気がする/1回目のセッションに比べ, かなり皆の関係がほぐれてきた気がする。(自分の動き)1人で話すときは, もの凄く緊張します。今, 思い返してみても, 自分がちゃんと話せていたか思い出せませんね。(満足した点)私は自分のことを話すとき, 無意識のうちに, よく話そうとしてしまいます。しかし, 今日のセッションでは, 素直, 正直, 率直を意識して話せたので, 自分の事をありのまま話せて満足です。(不満なこと)カウンセリングの一環だから, 上手く話すことが大事というより, 素直に話すことの方が大事だと考えているが, どうしても上手く話せないと気落ちしてしまう。(その他)どうしても自分について話すときに見栄を張ろうとしてしまうのは, 私の良くない癖だと感じた。

●4回目=セッション3 テーマ：「友人」(魅力度：5.89)

スタッフの感想：参加したMeは9名で, 1名欠席した。結構よく自己開示している。セッション中は欠席者を気にするような様子は見られなかったが, 欠席していたMeのことを気にするような感想がいくつかあった。

Meの感想：(グループの動き・雰囲気, 他のメンバーの動き)話している時に, 手がふるえている人もいて, 緊張しているんだな…って思いました。しかし, 緊張している人でも自分のことを話せていたので, グループ内の雰囲気が良いんだとも思いま

した。(自分の動き)話すと言葉にできなかったことがあって, 私はそれはまだ話したくないことだったのかなと分かった。(満足した点)お互い傾聴し合っている雰囲気がとても良かった/皆に友達がいるところ。(不満なこと)前は素直に話せたのにかかわらず, 今回はよく見られたいといったような欲が自分にあったように思う。(その他)人前で話す時に緊張を少しでもおさえる方法があれば教えてほしいです…/友達が欲しいです。

●5回目=セッション4 テーマ：「仲間」(魅力度：5.89)

スタッフの感想：欠席者はなく, 全員参加していた。落ち着いた穏やかな雰囲気。

Meの感想：(グループの動き)何を話しても受け入れられるような空気を感じました/話し手に対して笑いかけることが増えたように思う。(自分の動き)なるべく周りの皆を見て話そうと思っていたのですが話すことにやはり集中してしまい, 十分に出来なかったと自分では思いました/前回よりも緊張せず, 伝えたいことを率直に話せた。(満足した点)話したいことが伝えられたこと/皆と会話をしてすごく楽しめた。(不満なこと)リア充が多い/自分の感情についてあまり触れられなかったのが心残りです。(その他)今回の反省点を次回では改善できるように努力したい/以前よりも, このふりかえ紙を書いているときにおだやかに自分をみつめなおすことができるようになったかと思う。

●6回目=セッション5 テーマ：「恋愛」(魅力度：6.10)

スタッフの感想：欠席者はなく, 全員参加していた。各人各様の体験が語られる。

Meの感想：(グループの動き)セッションをやるごとに、グループが仲良くなっていく気がします/皆いつもよりも熱く話っていたように思う。(自分の動き)私は普段、恋愛の話は聞き役に徹しているためめずらしい機会だった/今回は落ちついて話すことができました。(満足した点)制限時間に終わらないくらい、十分話せたこと/自分の恋愛観について話す機会は新鮮でした。(不満なこと)聞いている人がつまらないと思わないような話し方をしたいです/補足で話したいことがあったにもかかわらず、恥ずかしさでことわってしまった。(その他)「口からデマカセ」ではないですが、思いつめずに話せるようになってきて、3分間が楽しめるようになりました!

●7回目=セッション6 テーマ：「結婚」(魅力度：6.10)

テーマ：「結婚」

スタッフの感想：欠席者はなく、全員参加していた。いろいろな考え方があることが伺える。

Meの感想：(グループの動き)皆、時間内に話を終えることが上手になってきた気がする/話がつまったり、時間がたくさん余ることが少なくなったように感じる。(自分の動き)普段友人とは話さない内容なので、話すことでお互いのことを知って、うち解けていくような感じがしました。(満足した点)気になっていることがあり、初めて質問できました。(不満なこと)前回、話したかったけれど、話せずじまだったと書いたことで気をつかわせてしまったかもしれないと思った。しかし、嬉しかった。(その他)結婚についてあまり良いイメージがなかったのですが、少し良い方向に変わ

りました。

●8回目=セッション7 テーマ：「家族」(魅力度：6.50)

スタッフの感想：参加したMeは9名。家族の有り様はかなり異なっている。

Meの感想：(グループの動き)話しているうちに感情があらわれてきて泣きそうになってしまった。(自分の動き)家族とどこか美味しいレストランへ食べに行きたくなった。(満足した点)家族といっても本当に人それぞれの家庭があるのだと感じました。自分の家族を見直すきっかけになったと思います。(不満なこと)早口で話してしまいました。(その他)色々な家族がいるけど、みんな家族が好きなんだと思いました。

●9回目=セッション8 テーマ：「先生」(魅力度：5.89)

スタッフの感想：参加したMeは9名。肯定的、否定的の両方の発言が出る。

Meの感想：(グループの動き)段々と話しやすい雰囲気になっているのだと感じました/全体的に、落ち着いて話を受信・発信できるようになってきてると思います。(自分の動き)始めのセッションでは、テーマについて話すので精一杯でしたが、今ではメンバーの反応を予想しながら話してみたりする程度の余裕があります。(満足した点)比較的、伝えたかったことを伝えられたと思います。(不満なこと)上手く伝えられなかったこと/少し話しづらかった。(その他)次回何を話そうか悩みます…。

●10回目=セッション9 テーマ：「私のキーワード」(魅力度：5.80)

スタッフの感想：欠席者はなく全員参加していたが、CoFacで1名欠席者が居た。

比較的否定的な内容(自信がない等)が多く語られる。

Meの感想:(グループの動き)今回のテーマは難しかった気がしました。時間を余らせてしまう方が多かったように見えたので…。(自分の動き)今回、上手く話すことができず、話が止まってしまいました/今まで緊張を隠している部分があったので、思いっきり緊張してると宣言したら気持ち楽になりました。(満足した点)その人が話しやすいような雰囲気但至少でも貢献できたら満足です。(不満なこと)いろいろと考えすぎてしまい、話がまとまらなくなったり、本来話したかったことを忘れてしまいました/話したいテーマを話せた反面、深く掘り下げることは出来なかったので、3分間で出し切れるようにしたいです。(その他)回数を重ねるごとに自由セッション?で会話に入ってくる人が増えているのを感じました。

●11回目=セッション10 テーマ:「今ここで話したいこと、話せること」(魅力度:6.67)

テーマ:「今ここで話したいこと、話せること」

スタッフの感想:参加したMeは9名で、CoFacも1名欠席者が居た。深い話、浅い話と様々だが、それぞれの様子が分かる。

Meの感想:(グループの動き)いつものセッションとは違い、「これ」というような決まったテーマがなかったため、悩みを話す人や楽しい話をする人など様々で、その話ごとにグループの雰囲気が変わったように思いました。(自分の動き)自分なりに素直に話せたように感じます。(満足した点)10回目にして、緊張しないで話せるよ

うになりました/皆の悩みや思っていることを聞けてすごくスッキリした気分になった。(不満なこと)話が途中になっているメンバーがいたが、その後を聞くことができなかった。あとの話が気になった/話す内容はこれでよいのかと思っていたこと。(その他)今回、自分は話している人に夢中で、エンカウタグループということを忘れてしまった。映画をみているようだった。

●12回目=セッション11 テーマ:「今ここで話したいこと、話せること」(魅力度:6.00)

スタッフの感想:参加したMeは9名。それぞれにバラエティに富んだ内容で語っている。

Meの感想:(グループの動き)テーマがはっきり決まっていなため、話の内容が悩んでいることや最近会った話など様々で、その人が今、どんなことを考えているのか分かるセッションでした。メンバー間の発言が増え、よい雰囲気に感じました。(自分の動き)直前まで何を話すか考えつかなくても、3分のストップウォッチを動かしてしまうと話せている自分に少し驚いています。(満足した点)皆それぞれ違う話題で、聞いて共感したり、楽しかったりためになったりして、充実した時間を感じられてよかったです。(不満なこと)3分タイムが1周した後のフリートークで、もう少し輪の中に入っていきたく感じました。(その他)回を重ねるごとに次は何を話そうかなと楽しみになりました。信頼感が生まれているのかなと思いました。

●13回目=セッション12 テーマ:「今ここで話したいこと、話せること」(魅力

度：6.10)

スタッフの感想：参加したMeは9名。それぞれの暮らしぶりが浮き彫りになる感じ。

Meの感想：(グループの動き)一人一人が話し終えるたびにどどん場の空気が和やかになっていく。(自分の動き)話したいことが項目としてはたくさんあって、選べずにあたりさわりのない話をしてしまったけれど、近況を話すだけですっきりして驚いた。(満足した点)皆の少しブラックな一面が見て取れた点/自分の素直な気持ちや、話したいことを素直に話せ、また自分がとても楽しくなれたことが満足です。(不満なこと)少し雑談会みたいになってしまったこと/自分の番が来るまで、ずっと話題に悩んでしまったこと。(その他)“自分”を見つめなおすことが出来て、漠然としたモヤモヤが消えた気がします。

●14回目＝セッション13 テーマ：「今までの感想 (魅力度：6.50)

スタッフの感想：参加したMeは8名。肯定的感想が多い。

Meの感想：(グループの動き)心にある気持ちをそのまま言葉にできたと思います/仲が良いおかげで皆居心地が良さそうだ。(自分の動き)事前に考えてきても、いざ自分の番になると緊張から頭の中が真っ白になってしまいます。(満足した点)一人じゃない十数人の前で話せたという実感を持てた。(不満なこと)もっと話したい、聞いてほしいことがあった。(その他)セッションを重ねていって、もちろん楽しかったですし、自分を見つめ直すことや、メンバーのことを理解することができて、自分にとって学ぶことが多くありました。

3. 参加後の気持

「参加者カード」への記載によれば、7段階評定(1～7)の平均は、満足度=6.71。

「ただ授業を受けノートを取るだけの大学生活に、自分を知り、メンバーの考えを知ることができるこのゼミがあって本当に良かったです。」/CoFac「コ・ファシリテーターとして自分が働けたか」というと、本当に全くだめだめでした。もっともっと勉強するべきだと思いましたが、だめだめなところもメンバーが助けてくれたように思います。」

IV 考察

1. メンバーにとってのグループ体験

今回のグループの特徴は、①メンバーの参加動機が「研修型EG」である、②構造的に「構成」(セッション1)→「半構成」(セッション2～9)→「非構成」(セッション10～12)という経過をたどっている、③ファシリテーションは「コ・ファシリテーター方式」である、ことがあげられる。このような特徴を持つグループで、Meはどのような体験をしたのであろうか。

学部3年生のゼミ生を対象とした今回のEGは、授業の一環であったため、「義務づけられた参加」である。したがって、参加メンバーの動機付けは低いことが考えられ、事実、メンバーの口からも抽選漏れによるゼミ参加であることが数人から報告された。これは、篠原ら(2007)が指摘した、看護学生の研修型EGの特徴である、①動機付けが低い、②MeのほとんどがEG初体験で不安感が高い、③Me全員が青年期に属し青年期特有の心理的課題に直面している、④等質性集団であるため相互交流がお

きにくい、などが、そのまま起こることが想定された。

今回のEG体験を振り返ると、これら4つの問題点は、実はすべて関連していることが分かった。実際に起こったグループの展開はこうである。まず、②の初心者不安感の後述する、グループの安全弁であるファシリテーターの「存在感」によって急速に解決された。そのことによって、④の「相互交流」は、滔々と流れ始め、まさにグループに「命」が誕生した。その結果、③の「青年期課題」もグループ全体で共有し、逆に等質性集団であったからこそ、多くのメンバーで問題を「抱える」ことが出来た。そして①の「動機づけ」は逆に低かったために、思わぬ自己の成長を発見した、という「収穫」を得た喜びが多くのメンバーから語られた。このような高展開はセッションごとの魅力得点の推移を見ても、明らかであると言えよう。

セッションの回を追うごとに、セッションへの魅力得点が増え、EG開始時の「意欲度」, 「期待度」より全セッション終了時の「満足度」が高い、もしくはどちらも最高点で変わらない、という人が10人中6人だった。この人たちにみられる共通の特徴は、それぞれに何らかの課題や悩みを持っているが、このEG体験を肯定的に受け止め、「自己信頼」をより確かなものにした、ということがあげられる。PCAの祖である、Rogers(1970)も、グループに対し絶大な信頼感を寄せることによって、自信のない、不安に満ちた人が繰り返し信頼される経験を通して、自己を信頼できるようになる、としており、福井(2010)も「EGは自己信頼を獲得し、真実の自己を発見す

る場所」と述べている。

一方で、最初から最後まで、魅力得点がややlowレベルで変わらない人や、非構成になって欠席がちになった人、また最後に満足度を評価しないで終了した人もいた。この人たちをひとくりに特徴づけることは乱暴かもしれないが、本人の様子や話から推察されるものは、心理的に何らかの葛藤・問題を抱え、今なおそのプロセスの中に程度の差はあれ、とどまっているのではないかということである。EGは「本音が出やすい場所を人工的に用意」(下田, 2010)したもので、その本音が出ることへの恐怖があったのかもしれないし、非構成の、各人の内面深くにある言葉になりにくい思いを探るということが大変に重荷であったかもしれない。もしくは徐々に肯定的変化を遂げつつあるメンバーらの放ち続ける、一種の「心理的圧力」に同調しきれない「抵抗」をあらわしているのかもしれない。いずれにしても、下田も言うようにグループにとってメンバーひとりひとりの存在は果てしなく大きく、個々のメンバーの「世界」がEGにとって「一番大事」であるだけに、「欠席」という形の存在の表し方は他のメンバーに微妙に心理的影響を及ぼした事は間違いのないと思われる。

2. 「構成」→「半構成」→「非構成」における体験の変化

前述したように、「構成」→「半構成」→「非構成」の流れで展開していったが、授業が始まって間もなく、ゼミ生とCoFac、そして指導教授と「飲み会」を一度開催している。「構成」におけるエクササイズの実行で、初対面の壁を取り払い、他のMe

をぐっと身近に感じる効果があるが、この飲み会によってさらに同一グループとしての一体感も増し、ゼミへの所属意識が強化される、という効果もあったと思う。「構成」において、まずは他者理解が促され、続いて自己理解が促された。しかしこの段階では、Meには「枠」が与えられ、Facの指示に従ってパフォーマンスを行ってればよいという、依存的・受動的な心理状態に置かれており、自己理解は浅い。

続く、「半構成」においては、毎回異なるテーマを順不同に全員、1人3分話す、というものだが、この段階にくると、Meは自立・自律を余儀なくされる。順番がきたら自分にまつわる「何か」を話さなくてはいけないし、どのようにストーリー立て、どのように伝えるかも計画しなければならない。また、話すテンポや自分の視点の位置、表情、態度などすべては「自己責任」である。最初Meは、時間内で話し終わらない悩みを訴える人が圧倒的に多かったが、回を重ねるごとにその課題は解決され、話の「内容」について考察するようになっていった。不思議と、順番がきて話すことに抵抗を示す人がほとんどいなかった。みな、テーマを受け入れ、話すことも受け入れ、「私は後で」とか「考え中だから」などと拒否する人がいなかった。それだけこのEGの構造は絶対視され、したがって集団内の心理的圧力も強いものがあったにちがいない。

そして、8回の「半構成」で自己主張の訓練をした後に3回の「非構成」の実施となり、「話したいこと、話せること」を順不同にやはり全員、1人3分で語った。この「構成」から「非構成」に対処するMe

心理の過程は、エリクソンの心理・社会的発達論における乳児期から青年期への心理的発達(基本的信頼→自律・自立→同一性獲得)の流れのごとく、であったろう。「非構成」の段階に来ると、Meはその時点で気になっている自己の課題や問題を述べる者も現れ始めた。途中、現実がままならないことに対する自己への反省を述べたり、過去のつらい出来事を思い出して落涙したり、また逆に正面から向き合ったことを述べることを避けてか、まったく関係のない一般的な話題を述べたり、各人ともさまざまな心理的な様相ではあったが、重なるEG体験が何らかの形で各メンバーの感情に作用したことがうかがえた。野島(2000)も言うように非構成EGの中で「自分に気づいていくプロセスが生じ始めると自分と向かい合うように」なっていった結果であろう。

3. ファシリテーションについて

メンバーは異口同音にメインFacに対し、安心感、安全感を感想にあらわしていた。メインFacは、EG体験が初心者で不安感の強いMeたちに率先して、課題に対する3分間の話を話してみせ、こういう風にやればいい、という安心感を毎回示した。また、その話も青年期のMeが聞いてほっとするような、ほのほのとした内容に焦点化されたものだった。さらに、Meの感想の中で多く挙げられていたのが、Facの応答のことだった。Facの支持的なうなづきや穏やかな表情もMeに励まし、安全感を与えていた。野島(2000)はEGにおけるファシリテーションの機能として、①グループの安全・信頼の雰囲気形成、②相互作用

の活性化, ③ファシリテーションシッ
の共有化, ④個人の自己理解の援助, ⑤グ
グループからの脱落・心理的損傷の防止, を
あげている。今回のEG体験において, こ
これらの機能性は十分であったと評価でき
ると思う。

今回, このグループではファシリテ
ーター養成のための実践活動の一環として,
ベテランファシリテーターと新人ファシリ
テーターを組み合わせEGを行う「コ・
ファシリテーター方式」が採用された。グ
グループを安全に促進させるためにメイン
Facと互いに補いあう役割を担うCoFacは
今回院生3人が務めた。全員がファシリ
テーターは初心者ではじめは戸惑いや気負
いもあったが, ベテランFacと組むこと
により, 「負担のない形で」「技法や態度を
目の当たりにし」「それらを取り入れ, 学
習する」(野島, 2011)利点を楽しむことが
出来た。何より, 「コ・ファシリテーター
方式」の最重要ポイントはCoFacが自由
に発言できるFacとの関係性である。少
なくとも各セッションで, CoFacはFac
の権威や支配性に「萎縮」(野島, 2011)
することなく, 自由にメンバー全員の
発言後にファシリテーションの習いごと
をすることが出来たと思う。この関係性
を養うためにセッション前後のミーテ
ィングを十分に行うこととされているが,
今回はゼミ時間を使って, Facとファシ
リテーションの在り方やメンバー, グル
ープの動きなどの検討会(GrSV)を重
ねてきた。この結果, 「メンバー以上
Fac以下」の微妙なスタンスが自分たち
にもメンバーたちにも浸透し, グル
ープ内での役割を各自認識できること
となった。

また, Facへのコメントとは別に, Me
相互の話を聞く態度に言及した感想も多
くみられた。うなずく, 目を見る, など
のサポート的な態度に励まされ, うれし
く思った, という感想が毎回見られたの
も今回のグループの特徴だろう。このこ
とから, Meひとりひとりがファシリテ
ーション機能を持ち, グループを作っ
ていったことが伺える。

文献

- 安部恒久(2006). エンカウンター・グ
ループ仲間関係のファシリテーション
—九州大学出版会.
- 福井康之(1981). 人格成熟促進のため
の授業として試みたグループ体験実習
の検討. 佐治守夫・村上英治・福井康
之編. 「グループ・アプローチの展開」
(誠信書房), 124-154.
- 福井康之(2010). エンカウンター・グ
ループの源流を探りコミュニティ・グ
ループを模索する. 伊藤義美・高松 里
・村久保雅孝編. 「パーソンセンタ
ード・アプローチの挑戦—現代を生きる
エンカウンターの実践—」(創元社),
99-110.
- 星野 希・野島一彦(2008). 「半構成
方式」によるエンカウンター・グ
ループのファシリテーター養成に関
する考察—ファシリテーター・キャン
ディデートの視点から—. 九州大学
心理学研究, 9, 153-161.
- 鎌田道彦・村山正治(2000). 必修授
業のエンカウンター・グループにお
ける帰りがたがる学生への介入過程.
日本人間性心理学会第19回大会
発表論文集, 66-

- 67.
- 増田 實(2000). 対人的態度・あり方体得へのひとつのアプローチ—エンカウンター・グループ志向をベースにした授業展開—. 日本人間性心理学会第19回大会発表論文集, 70-71.
- 森園絵里奈・野島一彦(2006). 「半構成方式」による研修型エンカウンター・グループの試み. 心理臨床学研究, **24** (3), 257-268.
- 鳴沢 実(1987). 授業の一環としてのエンカウンター・グループ合宿の教育的効果の一端—ある高等看護学校を例として. 東京都立大学学生相談室「学生相談室レポート」, **14**, 108-115.
- 新田泰生(1982). エンカウンター・グループによる授業に関する基礎的研究. 宝仙学園短期大学紀要, **7**, 43-60.
- 野島一彦(1997). 大学の授業としての構成的エンカウンター・グループ. 日本人間性心理学会第16回大会プログラム発表論文集, 92-93.
- 野島一彦(2000). エンカウンター・グループのファシリテーション. ナカニシヤ出版.
- 野島一彦監修/高橋紀子編(2011). グループ臨床家を育てる—ファシリテーションを学ぶシステム・活かすプロセス—. 創元社
- 野島一彦・金子周平hoka(2004). 「複数コ・ファシリテーター方式III」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み. 九州大学心理学研究, **5**, 1-7.
- 野島一彦・桂木 彩ほか(2007). 「コラボレーション方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み—〈テーマ設定法〉を中心に—. 九州大学心理学研究, **8**, 175-183.
- 野島一彦・江 志遠ほか(2008). 「コラボレーション方式II」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み—〈テーマ設定法〉を中心に—. 九州大学心理学研究, **9**, 163-170.
- 野島一彦・高橋大樹ほか(2010). 「コラボレーション方式IV」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み—テーマ設定の留意点と非構成的セッションの導入を中心に—. 九州大学心理学研究, **11**, 235-243.
- Rogers, C. R. (1970). Carl Rogers on Encounter Group. Harper& Row. 畠瀬 稔・直子(訳)(1982). エンカウンター・グループ. 創元社.
- 下田節夫(2010). 「グループなるもの」について—エンカウンター・グループについての一つの見方—. 伊藤義美・高松 里・村久保雅孝編. 「パーソンセンタード・アプローチの挑戦—現代を生きるエンカウンターの実際—」(創元社), 111-122.
- 篠原光代・野島一彦(2007). 看護学生のための「半構成方式」研修型エンカウンター・グループのファシリテーションに関する一考察. 九州大学心理学研究, **8**, 155-163.